

江西省官山自然保護区のカラヤマドリ

陳利生・吳和平・余澤平・陳琳・左文波

江西省官山自然保護区管理所

訳 福井和二

摘要 1984, 1993, 2001年と間隔をおいて、官山自然保護区のカラヤマドリについてロードセンサス法による調査を行なった。生息状況と個体群の分布密度の資料から、カラヤマドリの個体群変化へ影響した重要な原因がわかった。調査で得た資料は今後のカラヤマドリの保護と管理に提供したい。

カラヤマドリ (*Syrnaticus ellioti*) は我が国の固有種で、国際絶滅危惧野生動物に属し、我が国の国家1級重点保護動物の対象種となっている。カラヤマドリの主要な分布域は長江以南、北緯24°~31°の華東から華南地区、江西省、安徽省南部、浙江省、福建省、湖南省、広東省、広西省等の各地に分布している^[1]。貴州省雷公山もカラヤマドリが分布するといわれる^[2]。江西省はその主要な分布域であり、官山自然保護区は中でも最も集中的に分布するところである。我々は、保護区内のカラヤマドリの個体群密度の変化状況を把握するために、1981年保護区設立以来、3回にわたって調査を行なったので、その結果を報告する。

1. 自然概況

官山自然保護区は省級自然保護区に属し、総面積2263hm²を有す。所在地は江西省西北の九嶺山脈の中ほど、南斜面の北緯28°33'~28°36'、東経114°31'~114°36'、hyoukou 270~1480mに位置する。気候は典型的な中亜熱帯、湿潤な気候で^[3]、平均気温16.2°C、月平均気温の最高温度は26.7°C、月平均気温の最低温度は4.2°C、年間総日照時間945.6h、年間降雨量1700~1800mm、年平均相対湿度84.8%、無霜期間250日、霧の日143日、結氷17日。保護区の地形は複雑で、ほとんどが山林、宜豊、銅鼓の両県に跨り、険しい峰々が林立し、谷が縦横に切れ込み、溪流が流れる。域内の森林は密に茂り、豊富な食物、十分な水分、温暖な気候等々、カラヤマドリの成長、繁殖に優れた条件を備えている。

2. 調査方法

調査はロードセンサス法と定点観察法を組み合わせで行なった。

2.1 ロードセンサス法^[4] 区域内に3800~5800mの5ルートを予め定めて、1984年、1993年、2001年の3回、年4回の調査を行なった。各季節、各ルート間で、個体群密度の変化は少なかった。表1に3回の秋季における調査結果を示す。ロードセンサスには、50m巻尺、コンパス、高度計(標高測定用)、12倍双眼鏡、30倍望遠鏡を使用した。調査員は約2km/hの速度で歩き、コース両側で観察されたカラヤマドリの行動、鳴き声を記録し、単位面積当たりの密度を算出した。(密度=N/2xy; Nは個体数、xはコースの距離、yは平均直線距離)。

コースの位置および植被状況; 第1ルート、李家屋から龍坑まで、標高450~800m、距離4500m、植被状況は主に常緑広葉樹林、鬱閉度0.95。第2ルート、山棚から猪欄棚まで、標高320~750m、距離5500m、植被状況は常緑広葉樹とスギの混交林、鬱閉度0.9。第3ルート、李家屋から將軍洞まで、標高450~600m、距離3800m、植被状況は常緑、落葉広葉混交樹林、鬱閉度0.9。第4ルート、山棚から鶏公塙^{ジイコング}まで、海拔32~1000m、距離5800m、植被状況は常緑、落葉広葉、スギ、竹林などの混交林、鬱閉度0.85。第5ルート、李家屋から大草坪まで、標高450~600m、距離4000m、植被状況は常緑広葉林と竹林、鬱閉度0.9。以上の5つのルー

トの合計面積は約20km²で、保護区全面積の約9%に相当する。5つのルートにそれぞれ調査班を組織し、各班は一斉に午前8時に出発し、午後4時まで1日の観察個体数を記録する。

2.2 定点観察 あらかじめ予備調査による保護区内のカラヤマドリの生息、行動状況を基に8カ所の調査地点を定め、ブラインドを利用してカラヤマドリの行動習性、繁殖状況等を観察記録する。日没後もライトによる観察を行なった。

2.3 取材調査 官山地区におけるカラヤマドリの歴史および分布の変遷、個体群変化の要因に関する資料を収集した。九嶺山脈の東、八疊嶺以西太陽嶺一帯について、主に農家や狩猟関係者を訪ね取材した。

3. 結果と分析

3.1 ロードセンサスの結果 官山自然保護区におけるカラヤマドリの資源調査から、最近20年の時間の隔たりによる、カラヤマドリの個体群密度の変化を見ることができ、秋季ロードセンサス記録を、調査年を対照して表1に示す。

表1 官山自然保護区におけるカラヤマドリの個体群密度

調査時間	コース No	距離	平均距離	有効面積	観察個体数	個体群密度	密度平均値
		m	m	hm ²	羽	羽/hm ²	羽hm ²
1984.9.20	1	4500	44	19.80	14	0.35	0.35
	2	5500	36	19.80	15	0.38	
	3	3800	48	18.24	12	0.30	
	4	5800	34	19.72	14	0.36	
	5	4000	46	18.40	13	0.35	
1993.9.15	1	4500	42	18.96	20	0.53	0.54
	2	5500	38	20.90	23	0.53	
	3	3800	44	16.72	18	0.54	
	4	5800	36	20.80	23	0.55	
	5	4000	46	18.40	20	0.54	
2001.9.12	1	4500	42	18.90	33	0.87	0.9
	2	5500	36	19.80	36	0.91	
	3	3800	46	17.48	30	0.86	
	4	5800	36	20.88	38	0.91	
	5	4000	40	16.00	30	0.94	

3.2 定点観察の結果

今までの定点観測によって、カラヤマドリは群れを作る鳥類ということがわかる。カラヤマドリの群れは通常5~8羽で行動し、少なくて2~3羽、多いときは10羽を越えることもあり、またハッカク *Lophura nycthemera* との混群をつくることもある。彼らの食物の主なもの果実と種子で、その他にデンプン質の多い草の根や昆虫類も食べる。毎日の採食時間は割合に長く、夏から秋にかけて好んで砂浴を行ない、正午頃は活動が少なく、よく低い木の上や倒木の上でじつとくままり休息している。午後4~5時頃から再び採食行動を続ける。カラヤマドリは通常、生息場所(なわばり)を変えようとしなない。日が暮れると生息場所にある樹の3~5mの枝でねぐらをとる。夜が明けるとすぐ、枝を飛び降りてくる。カラヤマドリのつかい形成は通常3月か

ら4月初旬で、雄は翼を下げて雌の周りを廻るディスプレイを行い、雌がしゃがみ込むことで交尾が行われる。雌は密生した草叢の窪みに営巣場所を選択し、枯れ草、落ち葉を集めて巣を作り、産卵は通常5~6卵で8~9卵のこともある。抱卵は約20日、雛は2カ月で翼長の成長が止まる。本区のカラヤマドリの活動環境と生息場所の観察によると、カラヤマドリの主要な行動範囲は標高300~600mの広葉林中または、スギと広葉樹の混交林で、林床の灌木が比較的少なく、視界がやや開けたところ、地表の落葉堆積物が多く、食物資源が豊かな場所が多い。生息環境の類型は、低山帯、枝下3mほどの常緑広葉樹が比較的密生して繁茂し、林床の植被は単純で開けている林で、標高は比較的中位、水源にも遠からず、地形も傾斜の少ない中腹か、あるいは平坦な尾根に多い。保護区のカラヤマドリの行動環境と生息環境類型を現状から見てみると、標高高度に差があるといえども、基本的には人の干渉が少なく、環境破壊が進まず、広葉樹林の保存が良好で、食物資源が豊富な保護区の緩衝区と核心区に集まり、繁栄している。

3.3 取材調査結果 今までに調査した結果、官山地区にかつて非常に多くのカラヤマドリが生息していたこと、九嶺山脈中腹の南、北両斜面の農家や狩猟関係者は60年代にはジュケイと共に官山地区に多く生息していた。現に土地の人はカラヤマドリ、ハッカカン、ミノキジ (*Pucrasia macrolopha*)、ジュケイ (*Tragopan caboti*)などを総称して地花雉と云っている。これらの鳥のうち個体数の多いのはカラヤマドリとハッカカンで、ミノキジ、ジュケイも少ないとはいえず、早朝にはジュケイの鳴き声がよく聞かれた。70年代中ごろから官山地区のキジ類が年ごとに少なくなった。その原因は森林の伐採と厳しい狩猟圧による環境破壊と思われる。当時、人々はこれらのキジ類の価値を認識していないことから、市場で高く売れることに誘われ、狩猟する人が増え、日に200~300羽が捕殺されたという。

4. 討論

表によりわかることは、官山自然保護区に生息するカラヤマドリの生息密度は上昇する傾向にあり、個体数が年々増加している。その原因を分析すると、生息環境が優れ、気候が適し、食物資源が豊かであることその他、人々により、環境破壊行為の抑制が受け入れられたことが有効に働いている。過去に官山地域のカラヤマドリは数多く生息していたが、その後一時期狩猟圧と環境破壊が激しくて、個体数が急激に減少した。保護区が建設されて後、自然環境の保護と管理を強化し、盗伐、密猟を摘発し、カラヤマドリその他のキジ類の生息数回復を図ってきた。

しかし、保護区がとった保護措置は、盗伐、密猟を抑制することとなったが、保護区周辺区域では経済的利益に誘われ、盗伐、密猟等による人為的干渉と環境破壊が充分抑制されず、保護区域内のカラヤマドリの生息に影響を与えており、有効な何らかの措置をとらなければ、再び個体数低下の可能性が考えられる。このために、各級の政府は予算を増強し、保護管理施設の増強と、保護範囲を拡張し、カラヤマドリの生息環境を改善し、その他のキジ類を含むモニタリング調査を行ない、人為的干渉を徹底的に排除することにより、カラヤマドリの自然増加を確保するよう提案する。